

愛が、かかっている

〈愛知県〉 小林 美和 こばやし みわ 44歳

淡いピンクの花柄パジャマがとてもお似合いになる晴子さん。少し首をかshげてベッドに佇むたずそのお姿は、私たち看護師をゆつくりとした時間の流れへと誘うものでした。

西日が少し厳しい夕暮れ、カーテン越しに振りそそぐオレンジ色の淡い光は、晴子さんを温かく包んでいました。

晴子さんのパジャマの袖口からは、真っ白でぽてぽてとしたふくよかな両手が伸びています。重ねた両手の先には、安心手袋と称したミトンがかぶせられています。しかし、それさえも受け入れているかのように、晴子さんは何もいわず穏やかに佇んでいました。

晴子さんは認知症。点滴を何度

も自分で抜いてしまったり、大切な管を抜いてしまいそうなが続いた晴子さんは、医師からの指示でご本人と家族の了承の上、前日からミトンをさされていました。看護師が晴子さんの状況を見て外してよいことになっていました。

私は、そのミトンをそつと外しました。晴子さんは、無言でうなずくように頭を下げました。私のほうが、なんだかばつが悪い感じがしたのか、その場を取り繕うように晴子さんの手をさすりました。「ごめんなさいね……。嫌だったでしょう……」

晴子さんに、検査出棟の指示が出ました。慌ただしく動き回る私たちにも文句ひとつ言いません。むしろ優しい笑顔で私を見つめてくれてい

ました。ベッドを検査室へと移動し始めました。エレベーター待ちをしながら私は、晴子さんの布団が腰までしか掛かっておらず、ぽてぽてとした両手がパジャマの袖口から出てしまっ

ていて、寒そうに見えました。「晴子さん、お布団掛かってなくてごめんなさい。手が冷たそうだから、お布団掛けましょうか……。」と、布団を掛けながら両手を布団の中へ入れようとすると、晴子さんは、「愛がかかっているから、大丈夫……。寒くないよ、ありがとう」。

私は、涙が止まりませんでした。エレベーターホールに愛がふりそそいだ瞬間でした。私の方こそ、晴子さん「ありがとう」。